岡崎先生のこと

阿頼耶　順宏

激しい雨を伴って降り続く今年の梅雨だったが、七月六日には、朝から雨は降らず、昼前には白い雲と青空さえもみえた。千里会館へ向かう途中の両側の樹々の緑が、雨に洗われて美しかった。

告別式場で焼香のとき、やや斜めに語りかけられるようなお顔の先生の遺影と向きあうと、胸がつまった。あまりにも突然のご逝去で、信じたくなかったのだが、どうしようもない事実なのであった。

ちょうど一か月前の、六月六日は、恒例の東洋文化学科のバス族行だった。いつも、楽しみにして参加されていた先生は、この日もお元気だった。奈良、五条市の栄山寺まで回って、前に流れる吉野川の川原で昼食となった。上の道から少し下りたところに木陰があり、そこのベンチで先生と並んで弁当を食べた。水鳥が一羽、川面を悠々と泳いでいた。つがいではないんでしょうか、ちょっとさびしそうやなあ、というような会話をした。

ウーロン茶の缶をあけて飲んでいると、そばから先生が、きょうはお茶を持って来なんだ、ちょっと飲ましてくれんか、と言われた。今まで、誰にもそんなことを言われたことがなかったので、わたしは少しあわてた。口をつけたところをハンケチでちょっと拭いて、どうぞ、とさしだすと、先生はうまそうに飲まれた。——

大学では、よくあの聞き慣れたスリッパの音がして、わたしの研究室をのぞかれ、ちょっと、と入って来られた。いつも低い声で話されるのは、これからの東洋文化学科のこと、中国文化の大学院のこと、そして大学の現状と将来についてであった。とりわけ、その創設の際に大変な苦労をなさった大学院については、いろいろ気にかけておられた。修士課程を終えて出て行ったひとりひとりの学生について、あれは元気でやってるか、と尋ねられることも多かった。

十数年前、この大学に来て初めてお目にかかった頃の岡崎先生は、その態度や行動がさわやかで勇ましい感じがした。いかにも学究肌で、思うことをはっきり口にされるので、いささか恐ろしくもあった。しかし、それか

らの長いおつき合いをさせていただくなかで、わたしはわたしの田舎のことばでいう「ええし（好い衆？）の子」の純粋さに惹かれるようになっていった。

先生ご自身も予期されなかったであろう急な死の訪れに、いつものように首を傾けるようにして、何が起こったのかといぶかっておられるような気がしてならない。そして、もうあのスリッパの音を聞くこともできないと思うと、たまらなく寂しい。

（一九九三、七、六）